

プロフィール

[かわもと しょうそう]
2006年から本財団のヒロシマピース ボランティアとして、さらに2008年から被爆体験証言者として活動。また、この活動を通して来訪者に平和を願う折り鶴を乗せた紙飛行機を贈っています。川本さんの物語『母ちゃんの折鶴』が『生きるんだ』（ごとう和善、秋田書店発行）に掲載されています。

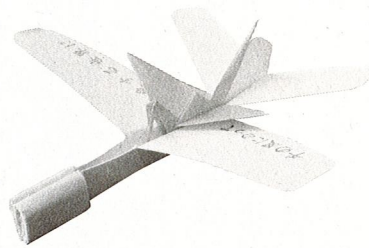
被爆体験記

戦争体験を語り継ぐ
ことが私の使命

本財団被爆体験証言者
川本 省三

原爆に家族を奪われて

永い孤独な生活に耐えながら生き続けて六十四年、独りで生きて行く事の辛さを何度感じたことでしょうか。袋町国民学校六年生の時、学童疎開で当時の三年生から六年生までの児童が三つの四つの村に行くことになり、そしてあの八月六日の惨劇に出会ったのです。広島市中心部の袋町学区の児童四百六十数名のうち十数名が、また、当時市内には三十六の小学校があり八千六百八人余りの子どもが疎開したと聞きました。家族が助かったり、親戚に引き



川本さんが世界平和を願い心を込めて作る紙飛行機

取られたり、施設に入ることができた児童を除く二千人余りが孤児になりました。

私は、広島駅の管理部に勤務していた奇跡的に助かった姉のお陰で孤児の仲間に入らずに済みました。しかし、その姉も半年後に白血病で亡くなり親戚の冷たい仕打ちに耐える生活が始まりました。二年後に満州の電機会社に勤務していた兄が、着の身着のまま

引き揚げてきましたが、当時十八歳だった兄を伯父がすぐに自分の養子にしてしまい、私は戸籍上では孤児になりました。

言葉に言い表せない孤児の生活

十歳になるかならないかで一人で生きて行くことになった私ですが、あの広島島の焼け野原の中、回りにいる人達も自分が生きること必死で、他人の世話をするなど有り得ませんでした。そんな中、孤児に生きる道を与えてくれたのがヤクザのお兄さん達でした。靴磨き屋台の手伝い、さらにくず鉄拾いなど、生きる術を教えてくださいました。しかし孤児の数が多すぎました。生きるための食料が足りません。一個の黒い団子を求めて争いが耐えませんでした。結局、強い者が残り、弱い者は飢えと寒さでどんどん死んでいきました。年が明けたときには、孤児の数は数百人と言われました。

そうした中、私は、一生懸命働き続けました。二十三歳になった時勤務先の会社の社長が結婚を勧められました。私は「結婚するのなら好きな人と」と思い、当時付き合っていた女性の家に申し込みに行きました。しかし、彼女の親から言われた「貴方は広島で生活していたそうだね。あの時広島にいた者は皆汚染されていて、生まれてくる子も不具が多いそうだ。そんな男の嫁に娘をやることはできない」とはショックで返す言葉もありませんでした。

好きな人と結婚できないと分かるのもかも嫌になり、仕事もやめ、ギャンブルに溺れ、自暴自棄になっていきました。そして三十歳を過ぎて本当に自分自身が嫌になり、誰も知らない所で死のうと思ひ、広島を去ることを決意しました。その時の所持金で行くことができた岡山駅を出た時、偶然にも「住込み店員求む」の広告を見つけた。この時ふとこの貼紙にもう一度新しい人生をかけてみようかと思ひました。訪ねたうどん屋の主人は、「貴方が本当にやる気があるなら」と雇ってくださるようになりました。それから私は必死で、目の前にある仕事に全力を尽くしました。そして岡山での生活が二十年余り過ぎたときは、私は食品会社の責任者として百二十名のトップとなってしまいました。

そんなある日、思いがけず一緒に疎開していた袋町の仲間の一人から小学校の五十年の合同慰霊祭と一緒にやろうと連絡がありました。二十五年ぶりに広島に帰ったとき、本当にみんな喜んで迎えてくれました。その後、年に一度の会合を通して友人達が苦勞しながら今日まで生きてきたことを知る事ができるようになりました。同級生だった一人の女性は「七日くらいたったとき、疎開先に母親が迎えに来てくれたが、その時は顔中包帯に巻かれていて、目だけ出ていた。私は、この人は母さんじゃないと逃げ回って、母親も連れて帰るのを諦めて

帰っていった。その後、一週間程して親戚の人が迎えに来て母親が亡くなったことを聞かされ、私は一番の親不孝者だと自分を責め続けた」と涙ながらに語ってくれました。その他にも、あの時自分が生きるためには回りの誰かを倒さなければ生きていけなかった、死んでゆく友達を見ても何もしてやれなかったという辛い経験した人もいます。現在こうして普通の顔で生活していることにみんな罪を感じているのです。私が、これからの若い人達にこうした事実を伝えようと言うと、「あれから六十年余りが過ぎて人は時効だと言うけれど、俺達には時効はない。あの時は憎いから相手を倒したんじゃない。生きるためにしかたなくやったことだけれど、相手が亡くなったことは決して忘れることができない。俺達には今家族がいるが、お前が話せば子どもたちがそれを知って苦しむ。頼むから止めてくれ」と彼らは言います。

あの時の体験を語り継ぐ
ことが私たちの使命

本当に辛い。しかし、あの時何の理由もなく死ななければならなかった人たちのことを、戦争の非人道性や悲惨さ、戦争で残された人々の苦しみをこれからの若い人たちに伝えることが自分の使命だと強く思うのです。その後私は会社を整理して、七十歳にして再び広島に帰り、現在のボランティアをしています。